

本分科会は、保育者、学生など50名近くが参加して行われた。

話題提供者は喜多村純子氏（白梅幼稚園副園長）、荒井薫子氏（あんず幼稚園主任）、赤羽とも子氏（小平市立小川西保育園園長）で、各園の取り組みを具体的に報告していただいた。

喜多村氏、荒井氏の幼稚園は地域は異なるが、次のことを大事に実践されていた。①在園児の保護者にサークルやクラブ活動の場を提供し、保護者同士のつながり（母親だけでなく父親も）を大切にしている、②入園前の親子向けの取り組みにも力を入れている、③結果として卒園後も保護者が主体的に集い、つながりがその地域に広がりつつある。

赤羽氏は、小平市の公立保育園で実施している「育児相談」「地域交流」について詳しく話して下さった。とくに、多様な保護者（背景や要求など）と、どのように信頼関係を結び、ともに子どもの育ちを支え合っていたらよいか、ということの大切さと、難しさが印象に残った。

報告のあと、参加者からも多数の質問が出され、活発なやりとりが行われた。「私たちに何ができるのかを考える材料をもらえた」「保護者との信頼関係をつくる上でも、保育に親子を巻き込み、互いにメッセージ交換することが大切なことがわかった」など、参加者にとっても、具体的な取り組みの紹介はたいへん参考になったようだ。

（小松 歩）

第三分科会 保育園における被虐待児への対応

話題提供： 矢澤 進（保育と虐待対応事例研究会代表 元東京都児童福祉司）

佐藤 初美（新宿区立中落合第二保育園）

丸山智加子（大田区立多摩川保育園）

第6回以降子ども虐待に関する分科会を実施してきたが、この8回では「保育所の役割が期待されていること」から、保育所における被虐待児への対応についてテーマとした。

1番目の報告者は、保育所の虐待事例研究会を主催している矢澤進さんからであった。矢澤さんは長年児童福祉司を勤められ、その体験や研究から具体的な事件をあげて説明され、被虐待児は、もともと親の対応でおきたものであっても親にとっては育てにくい子どもとなっている。親を責めることではなく共感しつつ親の育て方を変えていくことが大切であること。保育所の職員が虐待を受けた子どもの行動特徴をよく知っていてそれに見合った対応、親に対して他の子育て方法を伝えていく対応を期待していること、そして困難な子どもや心配な親を見つけたときには、保育施設のみで抱え込まないことが大切であることも強調された。

2番目の報告者は、新宿区立保育園の保育士で佐藤初美さんであった。虐待につながるやすい子どもの状況と母親のネグレクト状況に対して、保育所として取り組んできた実践2例が報告された。

3番目の報告は、大田区立保育園の保育士丸山智加子さんからであった。女兒であるのに丸坊主にして登園し、親は「やってみたかった」と述べたことから、要注意と判断してかわわりを続けた事例の報告であった。これらの報告では保育施設の果たす役割の大きさを改めて確認することができた。

参加者の感想は、保育施設において被虐待児が増えている現状が理解でき、保育者として虐待問題への学習と取り組みの必要性を認識することができた。子どもへのかかわり方について参考になったなどおおむね好評であった。

（中山 正雄）